

- (14) C. F. Beckingham. *ibid.* p. 562; Peter Conrad, "The Imperial Imagination," in *New Statesman* (Jan. 25, 1979), p. 117; Jean-Pierre Thieck, "E. W. Said, Orientalism," in *Annales* 35 (Mai-Août, 1980), p. 514.
- (15) Albert Hourani, "The Road to Morocco," in *The New York Review of Books*. (Mar. 8, 1979) pp. 29-30. ちなみに、このハウラーニーの書評は『オリエンタリズム』に寄せられた多くの書評中もっとも公正で、*あつとゆきごといたもの* になっている。
- (16) F. Malti-Douglas, *ibid.* pp. 727-28.
- (17) A. Hourani, *ibid.* p. 30.
- (18) F. Malti-Douglas, *ibid.* pp. 730-32.
- (19) B. I. Schwartz, *ibid.* p. 16.
- (20) たとえば「シンポジウム 地域研究の問題点」(『教養学科紀要』第十三号、東京大学教養学部、一九八一年)中の「アジア」(板垣雄三)二七一九頁。
- (21) 板垣雄三「東方問題再考」(『歴史評論』一九八一年一月)一五一—一六六頁。
- (22) 阿部謹也『中世を旅する人びと』平凡社、一九七八年、一六〇頁。
- (23) 森詠「マス・メディアと中東・アラブ・パレスチナ」および阪東淑子「パレスチナ問題と日本人の意識構造——わたしたちの中東認識、パレスチナ問題認識を妨げているもの」(板垣雄三・吉田悟郎編『パレスチナ人とユダヤ人——日本から中東をみる視点』三省堂、一九八四年、所収)。
- (24) 長沼宗昭「日本のなかのユダヤ人イメージ——ユダヤ人とは何か」(前掲書『パレスチナ人とユダヤ人』所収)。
- (25) たとえば前掲の、板垣雄三「東方問題再考」などが手がかりとなる。
- (26) 「外国人の日本文化批判」竹山道雄『主役としての近代』(講談社学術文庫、一九八四年)所収。
- (27) 杉本良夫、ロス・マオア編著『日本人論に関する12章』(学陽書房、一九八二年)三頁。

- (28) イザヤ・ハンドサン『日本人とユダヤ人』に対する批判としては、板垣雄三「シオニズムの反セミティズム性とナチズムのシオニズム性」(『現代史研究』第二十七号、一九七三年、所収)、浅見定雄『にせユダヤ人と日本人』朝日新聞社、一九八三年。また、この種の対比研究一般に対する批判として、今道友信・西尾幹二(対談)「比較研究の陥穽」(『理想』一九七八年四月号所収)三一—三三頁が参考になる。
- (29) 阪東淑子前掲論文、参照。なお、哲学者のヴィトゲンシュタインは「国民性」という曖昧な概念を全く認めようとしなかったという。この興味深いエピソードは、N・マルコム他『回想のヴィトゲンシュタイン』藤本隆志訳(法政大学出版局、一九七四年)五五—五六頁、六七頁に記されている。

訳者あとがき

今沢紀子

本書はEdward W. Said, *Orientalism* (Georges Borchardt Inc., New York 1978) の全訳である。なお、この日本語版では、著者が原著刊行後、数多く寄せられた論評・書評を踏まえたうえで新たに書き下した論考“Orientalism reconsidered”の全文を訳出し、本文末に付した。著者のサイドは一九三五年、イギリスの委任統治下にあったパレスティナのイェルサレムに生まれた。三十年代半ばといえ、ナチスの迫害を逃れたユダヤ人入植者の急増によって、アラブ・パレスティナ人の権利が奪い去られる方向でパレスティナ社会が激動した時期に当たる。まさにその時期にサイドは生を享けたのだった。やがてサイドは異邦に移り住むことになり、カイロのヴィクトリア・カレッジで教育を受け、その後アメリカ合衆国に渡ってプリンストン、ハーヴァードの両大学で学位を取得、そのまま学究生活に入った。一九七〇年以降、コロンビア大学の英文学・比較文学教授として今日に至っている。なおこの間に彼は合衆国市民権を取得している。著書としては本書のほかに、*Joseph Conrad and the Fiction of Autobiography* (66), *Beginnings: Intention and Method* (75), *The Question of Palestine* (80), *Literature and Society* (80) [編著]、*Covering Islam* (81) [タヤサ書房より邦訳近刊の予定]、*The World, The Text, and the Critic* (83)

〔平凡社より邦訳近刊〕がある。書名からもうかがわれるとおり、サイドは専門の英文学・比較文学分野の著作を発表するかたわら、パレスティナ問題にも深い関心を寄せており、PNC(パレスティナ国民議会)の議員として、また合衆国における親PLO派知識人の代表的存在として実践活動にもたずさわっている。ちなみに、雑誌『世界』(岩波書店、一九八二年三月号)に彼の論文の邦訳「パレスチナ民族自決の論理」が掲載され、彼のパレスティナ問題に対する考え方の一端はすでに日本にも紹介されている。本書『オリエンタリズム』は、西洋のさまざまな研究方法を身につけたサイドの人文科学者としての一面と、みずからの文化的自己確認を問う直そうとする彼のパレスティナ人としての一面とが、二つながら反映された作品である。

本書における方法論上の特徴としては、次の二点を指摘することができる。その一つは「オリエンタリズム」という語の従来の意味に加えて、さらに新しい意味を発見し、それらを考察していることである。「オリエンタリズム」とは、従来、東洋学ないし東洋趣味と理解されてきた。しかしサイドはこれを、「西洋の東洋に対する思考の模式」を示す語として、また「西洋の東洋に対する支配の模式」を示す語としても用いている。本書によって「オリエンタリズム」概念に関する社会的理解に変化が生じ、今後英和辞典の訳語の選定にあたって一考を要するような事態が訪れる可能性もある。もう一つの特徴は第一の特徴として述べた点とも密接に関連するが、ミンデル・フーコーの「言説」概念を援用していることである。サイドは「西洋の東洋に対する支配の模式」としての「オリエン

「オリエンタリズム」の本質を分析するにあたって、「オリエンタリズム」を「言説」とみなすことの有効性を主張している。本書にみられるフーコーの「言説」理解は権力論的観点からのものであり、従来もっぱら文学論的観点からの「言説」を理解しがちであった、日本におけるフーコー紹介の歪みを、本書は浮彫りにする役割をも果たし得るのではないかと思われる。

一九七八年に刊行されて以来、本書は欧米の読書界に広範な論議を巻き起こし、おびただしい数の書評・論評が発表された。その多く一部に目を通した限りにおいても、批評の論点は多岐にわたり、最大級の賛辞から挑発的な酷評に至るまで、本書に対する受けとめ方には大きな振幅が見られる。酷評の典型としては、邦訳もされたイスラム学者バーナード・ルイスの論評が挙げられる (Bernard Lewis, 'The Question of Orientalism' *The New York Review of Books* June 24, 1982. 福島保夫訳「オリエンタリズム論争1」『みすず』一九八二年二月号)。また、これに対するサイドの反批判も邦訳されている (*The New York Review of Books*, August 12, 1982. 福島保夫訳「オリエンタリズム論争2」『みすず』一九八三年二月号)。見当はずれの批評も少なくないなかで、サイドの意図するところを比較的的確に受けとめているものとしては、中国研究者ベンジャミン・I・シュウォルツの発言が挙げられよう (Benjamin I. Schwartz, 'Presidential Address: Area Studies as a Critical Discipline', *Journal of Asian Studies* November 1980). そのほか、日本研究者としての立場からのリチャード・H・マイニアの論評も邦訳されている (Richard H. Minear, 'Orientalism and

the Study of Japan', *Journal of Asian Studies*, May 1980. 伊藤弥彦訳「オリエンタリズムと日本研究」『みすず』一九八三年三月号)。

次に、重要と思われる論点を若干紹介しておきたい。まず一つには、本書における実証的手続の整備いかんを論じた批評がある。実証的手続の不備があれば、それに対して批判があるのは当然のことだが、本書が問題提起的な性格の書物である以上——そうであるからこそかえってこの種の不備が許されないのも事実なのだが——、この種の批判は、実証的手続の不備と思われるものの一つ一つについて、それがサイドの主張のどの範囲までを突き崩すものであるのか、その点を明らかにした上での批判であるべきだろう。たとえば、革命を意味するアラビア語 *thawra* の語源問題に関するルイスの批判およびサイドの反批判は不毛の論争に陥った好例と言えよう。

また一つには、オリエンタリズムの研究姿勢とその学問的成果との関係を問題とする論点がある。サイドは、研究姿勢を問題にしない限りにおいて、学問的成果の客観的・実証的価値が存在し得る可能性を否定してはいないといえ、実際には研究姿勢と学問的成果とを切り離すこと自体を否定する観点から、研究姿勢と学問的成果との総体としてのオリエンタリズムを批判している。この批判に対する書評・論評の反応は大きく二つに分かれている。一つはサイドの批判をもって、みずからの学問を問い直す契機にしようとするものであり (B・I・シュウォルツや R・H・マイニアの前掲諸論評)、もう一つは、研究姿勢と学問的成果とを截然と切り離し、学問的成果の功績・有効性なるものが存在することをもってサイドのオリエンタリズム批判に対する反証にしようとするものである (B・ルイスの前掲論評など)。ところで、ここにみられる研究姿勢と学問的成果とを切り離す態度については、それがこの論評に限ってみられるものではなく、日本においても、アジア・フォード財団資金援助受入れ問題を契機とする東洋学批判のなかで、日本の東洋学の克服されざる根強い伝統的態度として批判を加えられている (旗田巍「日本における東洋史学の伝統」『歴史学研究』一九六二年十一月号) という点を指摘しておきたい。

さらにもう一つの論点として本書における「オリエンタ」の捉え方をめぐるそれがある。サイドが抽出したオリエンタリズムの諸特徴を、西洋人のオリエンタ「中東に対する直接支配の事実と不可分のもの」と解釈した上で、直接支配という事実の存在しなかつた中東以外の地域 (日本) に対する西洋人の姿勢にも同様の特徴がみとめられることに注目する論者がある (R・H・マイニア前掲論評)。別の論者はその反対に、オリエンタリズムの諸特徴が中東以外の諸地域 (インドなど) に対する西洋人の姿勢には当てはまらないことを強調している (David Kopf, 'Hermeneutics versus History', *Journal of Asian Studies*, May 1980 など)。

いずれの論者も、非西洋世界のなかの特定地域についての実証的知識を踏まえて、サイドが抽出したオリエンタリズムの諸特徴を、西洋とある特定地域との間の具体的・現実的交渉のうちに求めているわけである。しかしサイドが本書で問題にしているのは、従来西洋が世界を西洋と非西洋世界とに二分し、後者に対して、各地域

の特殊性を無視し、観念的な「オリエンタ」イメージを一律に押しつけたということである。したがってこれらの論評は、この論点についての扱い方に限って言えば、サイドの意図するところを読み違えているように思われる。

以上、欧米における本書の受けとめ方をみてきたが、ここで日本に眼を転じてみよう。主体「観る側」としての西洋と客体「観られる側」としての非西洋世界とが対立するオリエンタリズムの構図に対して、近代日本はきわめて特異な関わり方をしている。西洋から観て地理的・文化的に非西洋世界である限りにおいて、言うまでもなく日本は客体「観られる側」である。しかし、近代日本は帝国主義列強の一員となる道を選び、植民地経営を視野において、西洋思想を積極的に学び取ろうとしてきた。たとえば、本書でも取り上げられているクロマーの『現代エジプト』は、一九一一年 (明治四十四年) に『最近埃及』と題して、最新の欧米思想の紹介を目的として創立された大日本文明協会から翻訳出版された。その序文のなかで協会会長の隈重信は、「(クロマー) 卿の埃及に於ける経営は我を韓国に於ける保護政治の上に参考すべきもの多きを思ひ、この本を韓国統監伊藤博文に送付した旨書き記している。ここに見られるような努力の結果、日本は西洋の東洋観をも撰取して、オリエンタリズムの主体「観る側」に立ったのである。したがって西洋オリエンタリズムに向けられた批判は実は日本のオリエンタリズムに向けられた批判であると言わなければならない。サイドはそのオリエンタリズム批判のなかで、西洋人が同時代の東洋に関心をもちなかつたこと、またそれと表裏一体をなすものとして、東洋の人間に関心を

もたなかったことを指摘し、とりわけ厳しく指弾している。日本でも、戦前・戦中、ひいては戦後の東洋史学を批判する試みのなかで、人間の存在を忘れて考証に没頭し、同時代の東洋諸民族の真相を捉え得なかった点が批判的になっており、サイドによる西洋オリエンタリズム批判と重なり合っている。現在、日本の東洋学において、この特質がすでに克服されたとは言いきれないとすれば、この点についても本書の問題提起は切実な意義を有しているといえよう。

本書は一九八一年、東京大学教養学部教養学科の板垣雄三先生のゼミナールでテキストとして用いられた。ゼミに参加した恩知理、鈴木均、栗田禎子、相原幸子、火浦俊彦、小野寺由美、友末真理子、茂木敏男、砂子恵、北村暁夫、内島美砂子、酒井啓子、杉田英明の諸氏と今沢の以上十四名がそれぞれ一節ずつ分担して日本語訳を準備し、授業に臨んだ。今回、全訳出版のため新たに翻訳をすすめるにあたって、当時のゼミ参加者の方々の訳稿を参照させていただいた。また、監修の板垣雄三先生と東京大学比較文化の杉田英明氏は、私の訳稿すべてに目を通していただいたばかりでなく、原文と照合し、適切な日本語に訳し直すということさえしていただいた。両氏には監修という言葉から一般に連想される仕事の内容をはるかに越えて、実質的には翻訳そのものに当たる仕事をしていただいたのである。そのほか、翻訳上のさまざまな疑問点を解決する上で、多くの方々から懇切な御教示をいただいた。また、編集の三浦徹氏、岸本武士氏ほか平凡社関係の方々にも非常にお世話になった。この

翻訳が右の方々のお力添えなくしてはあり得なかったことをここに明記させていただくとともに、紙上を借りて心から感謝の意を表したい。

(The Hague: Mouton & Co., 1970), pp. 688-703 に収められている。

153. Lewis, *The Middle East and the West*, p. 140.

154. Robert K. Merton, "The Perspectives of Insiders and Outsiders," in his *The Sociology of Science: Theoretical and Empirical Investigations*, ed. Norman W. Storer (Chicago: University of Chicago Press, 1973), pp. 99-136.

155. 例えばアンワル・アブデル=マレク、イヴ・ラコスト Yves Lacoste の近著や、その他の著者たちの *Review of Middle East Studies 1 and 2* (London: Ithaca Press, 1975, 1976) に発表された論文を参照。またノーム・チョムスキーによる中東政治についてのさまざまな分析、中東研究情報プロジェクト Middle East Research and Information Project (MERIP) による研究を参照されたい。つぎの書中にはすぐれた研究展望が提示されている。Gabriel Ardant, Kostas Axelos, Jacques Berque, et al., *De l'impérialisme à la décolonisation* (Paris: Éditions de Minuit, 1965).